

令和7年度の研究について

長野県学校体育研究会 研究部

1 令和7年度研究部グランドデザインの解説

(1) 信州教育とは何か（令和5年4月号「信濃教育」武田会長巻頭言から）

「信州教育とは」とさまざまに言われる。信州教育にはいろいろな側面があり、とらえる人によって千差万別であるが、一つの特徴として、子どもを中心に据え、子どもの内に建設される「問い」を大切にする教育と言えるのではないか。大正から昭和初期にかけて長野県師範附属小学校に設置された「研究学級」。その担任である淀川茂重が『途上～研究学級の経過』の中で「児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。」と述べている。ここに信州教育の原点があるように思う。「研究学級」創設の発案者であり、当時附属小学校の首席訓導であった斎藤節は「学説からも思想からも影響されるのはもちろんであるけれど、そこから教育は学べはしない。すべては事実からであり、実際からである。」と述べている。学説を参考にしつつも、子どもの学びの事実を重んじ、子どもの実際からスタートしようとする教育。これも信州教育の特徴と言えよう。川田殖は「明治から大正にかけて行われた国策としての画一的教育・官僚的教育に抗して、我が信州の教師たちは個性尊重の教育を重視した。信州の教育者には、数えきれないほどの独立的人格があり、千紫万紅、百花繚乱の趣を呈した。」と述べている。自主独立の精神に基づき、教師一人一人が「正しい」と思うことを革新的に実践しようとする教育。これも特徴の一つである。これらの教育を支えてきたのは、信濃教育会や郡市教育会の研究会などに自主的・主体的に参加し、そこでの活発な議論により成長しようとする教師なのである。

(2) 長野県学校体育研究会の強み

組織がその目標を達成するために大切なことは、その組織がもつ強みを最大限引き出すことであると言われる。本研究会は700余名という多くの会員からなる。これは大きな強みである。また、創立70余年という長い研究の歴史があることも大きい。他県では、小学校中心に体育の研究を進めており、中学校の授業が提案されない県もある。小中学校が連携して研究を進めているのも本県の強みである。本県では広く一般的に行われている男女共習の授業だが、いまだに男女別習で授業を行っている県は多い。「インクルーシブ教育」の視点からも、男女共習の授業を今後も展開していきたい。また、本県では、全県が一体となって研究を進めている。それを可能にしているのは、支部から県へとつながる組織である。これは先輩方が長い歴史の中で築き上げたものである。このように本県には、他県にはない優れた特徴があり、これらの強みを引き出し、生かしていく必要がある。

(3) 切り拓くべき今日的な課題

これから我々が進む未来は、予測困難な社会であると言われている。第4次長野県教育振興基本計画には、本県が切り拓いていくべき今日的な課題があげられている。その中から体育に関わるものを拾い上げてみた。「知識やスキルの習得に偏重した教育」「人間関係の固定化」「リアルな体験活動の減少」「新しい価値や時代を創造する資質能力の

必要性の高まり」「人とのつながりの希薄化」「経済格差による学びの機会の格差」等である。一つ一つが大きな課題だが、会員の力を集め、実践を通して切り拓いてく必要がある。

（４）共通理念～研究テーマ～研究の重点

共通理念は、これまでの研究を継承して「生涯にわたって運動に親しみ、健康で豊かなスポーツライフを構築していける人間の育成。」とした。また、この共通理念を具現するための問い（研究テーマ）を「すべての子どもたちが、自ら運動の楽しさを味わい深めていくにはどうしたらよいか」とした。そして本年度の研究の重点を「日々の授業の充実～すべての子どもが夢中になる運動と授業の工夫～」とし、実践を通して研究を深めることにした。

２ 研究の切り口

研究を推進するにあたり３つの「切り口」を設けた。各支部から選出された研究部員が、このうちの１つを選び３つのグループを構成した。

（１）カリキュラム

どのように子どもが変化していくのか、どのような社会のあり方を見通すのかという二つの視点をとりにいれてカリキュラムを検討したい。

（２）学習過程

子どもが自分で学びのルートやペースを選択することができる学習過程と、それを支える教師の役割を検討したい。

（３）学習形態

これまで実践されてきた「グループ学習」の考え方に「学び合い」の視点を取り入れた検討をしたい。

○研究部員のグループ分け

（１）カリキュラム	（２）学習過程	（３）学習形態
早野 洋一（下伊那） 両角 竜平（佐久） 佐々木 優（更埴） 清水 克哉（安曇野） 塩原 一矢（北安曇）	小平 貴彦（諏訪） 鈴木 海平（長水） 村澤 陽介（上伊那） 青木 孝文（長水） 小笠原 光汰（中高飯水）	土屋 健太（松本） 川口 純（下伊那） 原 勇介（上高井） 古田 雅喜（木曽） 忠地 昌成（塩筑） 中山 大介（上小）
世話係 大澤 忠史（副部長）	世話係 清水 直人（副部長）	世話係 中澤 卓二（副部長）

全体総括 須山 千才（部長）・宮崎 忠（副部長）